夜釣

泉鏡花

青空文庫

これは、大工、大勝のおかみさんから聞いた話である。

牛込築土前の、此の大勝棟梁のうちへ出入りをする、一寸使へる、岩次と云つて、女房持、小兒の二人あるのが居た。飲む、買ふ、搏つ、道樂は少もないが、たゞ性來の釣好きであつた。

また、それだけに釣がうまい。素人にはむづかしいといふ、鰻釣の絲捌きは中も得意で、一晚出掛けると湿地で蚯蚓を穿るほど一かゞりにあげて來る。

「棟梁、二百目が三ぼんだ。」

大勝の臺所口へのらりと投込むなどは珍しくなかつた。

が、女房は、まだ若いのに、後生願ひで、おそろしく岩さんの殺生を氣にして居た。

霜月の末頃である。一晚、陽氣違ひの生暖い風が吹いて、むつと雲が蒸して、火鉢の傍だと半纏は脱ぎたいまでに、悪汗が浸むやうな、其暮方だつた。岩さんが仕事場から——行願寺内にあつた、——路地うらの長屋へ歸つて來ると、何かものに

そゝられたやうに、頬に氣の急ぐ様子で、いつもの錢湯にも行かず、さく／＼と茶漬で済まして、一寸友だちの許へ、と云つて家を出た。

留守には風が吹募る。戸障子ががた／＼鳴る。引窓がばた／＼と暗い口を開く。空模様は、その癖、星が晃々して、澄切つて居ながら、風は尋常ならず亂れて、時々むく／＼と古綿を積んだ灰色の雲が湧上る。とぼつりと降る。降るかと思ふと、颯と又暴びた風で吹拂ふ。

次第に夜が更けるに従つて、何時か眞暗に凄くなつた。

女房は、幾度も戸口へ立つた。路地を、行願寺の門の外までも出て、通の前後をみた。人通りも、もうなくなる。……釣には行つても、めつたにあげた事のない男だから、餘計に氣に懸けて歸りを待つのに。——小兒たちが、また悪く暖いので寝苦しいか、變に二人とも寝そびれて、踏脱ぐ、泣き出す、着せかける、賺す。で、女房は一夜まんじりともせず、烏の聲を聞いたさうである。

然まで案ずる事はあるまい。交際のありがちな稼業の事、途中で友だちに誘はれて、新宿あたりへぐれたのだ、と然う思へば済むのであるから。

言ふまでもなく、宵のうちは、いつもの釣だと察して居た。内から棹なんぞ……釣も絲

も忍ばしては出なかつたが——それは女房が頬に殺生を留める處から、つい面倒さに、近所の車屋、床屋などに預けて置いて、そこから内證で支度して、道具を持つて出掛ける事も、女房は薄々知つて居たのである。

處が、一夜あけて、晝に成つても歸らない。不斷そんなしだらでない岩さんだけに、女房は人一倍心配し出した。

さあ、氣に成ると心配は胸へ瀧の落ちるやうで、——帯引緊めて夫の……といふ急き心で、昨夜待ち明した寝みだれ髪を、黄楊の鬢櫛で搔き上げながら、その大勝のうちはもとより、慌だしく、方々心當りを探しつた。が、何處にも居ないし、誰も知らぬ。

やがて日の暮るまで尋ねめぐんで、——夜あかしの茶飯あんかけの出る時刻——神樂坂下、あの牛込見附で、顔馴染だつた茶飯屋に聞くと、其處で……覺束ないながら一寸心當りが付いたのである。

「岩さんは、……然うですね、——昨夜十二時頃でもございましたらうか、一人で來なすつて——とうく降り出しやがった。こいつは大降りに成らなけりやいゝがツて、空を見ながら、おかはりをなすつたけ。ポツリく降つたばかり。すぐ降りやんだものですから、

可い鹽梅だ、と然う云つてね、また、お前さん、すたく、駈出して行きなすつたよ。：
へい、え、お一人。——他にや其の時お友達は誰も居ずさ。——變に陰氣で不氣味
な晩でございました。ちやうど來なすつた時、目白の九つを聞きましたが、いつもの八つ
ころほど寂寞して、びゆうく風ばかりさ、おかみさん。」

せめても、此だけを心遣りに、女房は、小兒たちに、まだ晩の御飯にもしなかつ
たので、坂を駈け上るやうにして、急いで行願寺内へ歸ると、路地口に、四つになる
女の兒と、五つの男の兒と、廂合の星の影に立つて居た。

顔を見るなり、女房が、

「父さんは歸つたかい。」

と笑顔して、いそくして、優しく云つた。——何が仕うしても、「歸つた。」と言は
せるやうにして聞いたのである。

「いけない。……」

「うゝん、歸りやしない。」

「歸らないわ。」

と女の兒が拗ねでもしたやうに言つた。

男をとこの兒こが袖そでを引ひいて、

「父おとつさんは歸かへらないけれどね、いつもうなぎのね、鰻あなぎが居ゐるんだよ。」

「え、え、」

「大おほきな長ながい、お鰻ととよ。」

「こんなだぜ、おつかあ。」

「あれ、およし、魚うを尺しゃくは取とるもんぢやない——何處どこにさ……そして？」

と云いふ、胸むねの瀧たきは切きれ、唾つが乾かわいた。

「臺だい所どころの手桶てをけに居ゐる。」

「誰だれが持もつて來きたの、——魚屋さかなやさん？……え、坊ぼうや。」

「う、ん、誰だれだか知しらない。手桶てをけの中なかに充満いっぱいになつて、のたくつてるから、それだから、

遁にげると不可いけないから蓋ふたをしたんだ。」

「あの、二人ふたりで石いしをのつけたの、……お石塔せきたふのやうな。」

「何なんだねえ、まあ、お前まへたちは……」

と叱しかる女房にようぼうの聲こゑは震ふるへた。

「行いつてお見みよ。」

「お見なちやいよ。」

「あゝ、見るから、見るからね、さあ一所においで。」

「私たちは、父さんを待つてるよ。」

「出て見まちよう、」

と手を引合つて、もつれるやうにばらくと寺の門へ駈けながら、
卵塔場を、灯の夜の影に揃つて、かはい、顔で振り返つて、

「おつかあ、鰻を見ても觸つちや不可いよ。」

「觸るとなくなりませよ。」

と云ひすてに走つて出た。

女房は暗がりの路地に足を引れ、穴へ掴込まれるやうに、頸から、肩から、ちり

毛もと、ぞつと氷るばかり寒くなつた。

あかりのついた、お附合の隣の窓から、岩さんの安否を聞かうとしてもしたのであらう。格子をあけた婦があつたが、何にも女房には聞えない。……

肩を固く、足がふるへて、その左側の家の水口へ。……

……行くと、腰障子の、すぐ中で、ばちやく、ばちやり、ばちやくと音がする。

……

て
手もしびれたか、きゆつと軋む……水口を開けると、茶の間も、框も、だゞつ廣く大
きな穴を四角に並べて陰氣である。引窓に射す、何の影か、薄あかりに一目見ると、唇
がひつつつた。……何うして小兒の手で、と疑ふばかり、大きな澤庵石が手桶の上に、
づしんと乗つて、あだ黒く、一つくびれて、ぼうと浮いて、可厭なもの形の形に見えた。
くわつと逆上せて、小腕に引ずり退けると、水を匆ねて、ばちやくくと鳴つた。

もの音もきこえない。

蓋を向うへははずすと、水も溢れるまで、手桶の中に輪をぬめらせた、鰻が一條、唯一
條であつた、のろくと畝つて、尖つた頭を恚うあげて、女房の蒼白い顔を、凝
と視た。——と言ふのである。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十四」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日第1刷発行

1987（昭和62）年10月2日第3刷発行

初出：「新小説」春陽堂

1911（明治44）年

※初出時の表題は、「鰻」です。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>